

## 特集

# カニングガム研究の未来へ向けて マース・カニングガム生誕100年記念特集企画

2018（平成30）年9月9日（日）  
早稲田大学戸山キャンパス33号館第10会議室

2019年はマース・カニングガム（Merce Cunningham, 1919/4/16-2009/7/26）の生誕100年にあたり、欧米各国ではこれを祝う数多の記念公演やイベントが企画されている（ロンドンのバービカン・センター、ニューヨークのブルックリン・アカデミー・オブ・ミュージック、ロサンゼルスセンター・フォー・ジ・アートパフォーマンス等）。そこで『舞踊学』第41号の特集として、日本におけるカニングガム研究の第一人者酒向治子氏を中心に、精緻な映像分析をダンス研究に導入して最新のカニングガム研究を紹介する平倉圭氏、今回の企画を進める核となった武藤大祐氏によるシンポジウム及び座談会を開催し、その成果を掲載することにした。武藤氏がカニングガムの長いキャリアを概観する年表を作成し、酒向氏、平倉氏には当日のトークを基にさらに各自の論点を展開した論文を寄稿していただいた。三者の報告に続いて行われた質疑と座談会部分は当日の録音から一部整理したものを掲載する（司会：外山，構成：武藤）。

企画にご賛同、ご協力いただいた理事会及び編集委員会の先生方、会場の手配にご尽力いただいた藤井慎太郎氏、早稲田大学文学部演劇映像コースの埋忠美沙氏にこの場を借りて感謝申し上げます。なお、画像掲載許可等についてマース・カニングガム・トラストの皆様にご協力いただいた。Special thanks to Ken Tabachnick, K. Gary Champi and Patricia Lent!

## 特集

### マース・カニングガムという複合体

武藤大祐（群馬県立女子大学）

マース・カニングガム（Merce Cunningham, 1919-2009）は、1940年代から2000年代にまでわたる大きなキャリアを生きた芸術家である。生誕100年を機に、様々なイベントが行われているが、ここではカニングガムの活動を年表とともに概観し、この巨大な存在を改めて見つめ直してみたい。

アメリカで初めての、舞踊団専属アーキヴィストといわれるデヴィッド・ヴォーン（David Vaughan, 1924-2017）を擁したマース・カニングガム舞踊団は、その記録・資料を体系的に保存・管理し、積極的に公開している。本稿でも、1997年に出版されたヴォーンによる詳細な年代記*Merce Cunningham: Fifty Years*, 2017年にミネアポリスのウォーカー・アートセンターで開かれた回顧展“Merce Cunningham: Common Time”の図録、およびマース・カニングガム財団のオンライン・アーカイブを使用した、カニングガムをめぐる資料の充実ぶり、とりわけオンライン・アーカイブの詳細さには目を瞠るものがある。

この膨大な情報は今後の多様なカニングガム研究

の可能性を確実に保証するだろうが、そのためのささやかな露払いとして、本稿は、①舞踊史上の影響関係と位置付け、②音楽や美術など他ジャンルのアーティストとの協働、③テクノロジーの導入、の三点に注目しながら、ごく基本的な事柄の確認を目的とするものである。

#### 1. 舞踊史上の影響関係と位置付け

マース・カニングガムがダンサーとして頭角を現したのはマーサ・グレアム（Martha Graham, 1894-1991）の舞踊団においてであることはよく知られている。エリック・ホーキンス（Erick Hawkins, 1909-1994）に続く男性ダンサーとして、カニングガムが同舞踊団に入団したのは1939年のことであった。

そもそもカニングガムがグレアムとの接点を得たのは、1937年に彼がシアトルのコーニッシュ芸術学校（Cornish School of the Arts）で演劇から舞踊に専攻を切り替えた際、そこで指導にあたった元グレアム舞踊団のボニー・バード（Bonnie

Bird, 1914-1995) を介してのこのようである。バードの支援を受けて訪れたベニントン舞踊学校で、カニングガムは自作やチャールズ・ワイドマン (Charles Weidman, 1901-1975) の作品を踊り、それを見たグレアムが声をかけると、カニングガムは応諾し、コーニッシュを中退した。

他方、コーニッシュでは当時ジョン・ケージ (John Cage, 1912-1992) がゲスト講師として教えていた。カニングガムは授業の課題としていくつかの振付作品を作り、その際にケージがピアノを弾いたという。つまりこの時点ですでにカニングガムはグレアムとケージの両方に会っていることになる。

1939年のグレアム舞踊団加入から1945年の脱退までの間に、カニングガムは*Every Soul is a Circus* (1939年初演) でソロ・パートを踊ったほか、*El Penitente* (1940年初演)、*Appalachian Spring* (1944年初演) などの作品に出演している。それと並行して、1942年には舞踊団のメンバーであったジーン・アードマン (Jean Erdman, 1916-) およびニーナ・フォナロフ (Nina Fonaroff, 1914-2003) とともに自身の振付作品を発表している。ケージとの協働もこの頃から本格化しており、1944年にはケージの音楽を使用した6つのソロ作品を、ケージとのジョイント公演で発表した。

このように1945年までのカニングガムの動向を追ってみると、まず名声の頂点へと向かいつつあるマーサ・グレアム、そして新しい実験音楽の可能性を開拓しつつあるジョン・ケージという、およそ異質と思える二つの文脈が意外なほど親しく交わっているのが印象的である。1945年に初演されたカニングガムのソロ作品*Mysterious Adventure* (ケージ音楽) を、グレアムは自身の舞踊団のレパートリー公演においてプログラムに入れてさえている。

他方で見落とせないのは、カニングガムとバレエの関係である。カニングガムは1940年からアメリカン・バレエ・スクール (School of American Ballet) に通い始めるが、これが (おそらくはホーキンスという先行例をふまえた上での) グレアムからの提案だったというのは興味深い (*Fifty Years*, 23)。またこのつながりから、リンカーン・カーステイン (Lincoln Kirstein, 1907-1996) はバレエ協会 (Ballet Society) の公演のためにカニングガムに作品*The Seasons*を委嘱している (1947年初演)。この作品もやはりケージの音楽で、美術と衣装をイサム・ノグチ (Isamu Noguchi, 1904-1988) が担当し、カニングガム自身も出演した。

ケージとともに振付にチャンス・オペレーションを用い始めるのが1951年の*Sixteen Dances for Soloist and Company of Three*であり、1950年代からカニングガムの前衛的な手法が本格的に展開

し始める。1953年初演の*Suite by Chance*では全面的に偶然性を取り入れ、空間・時間・位置がチャートとコイン投げで決定された。またこの年にマース・カニングガム舞踊団としての初公演を行い、翌年からロバート・ラウシェンバーク (Robert Rauschenberg, 1925-2008) が美術監督を務める。

ケージは1956年から、NYのニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチ (New School for Social Research) で名高い「実験音楽の構成法」のクラスを始める。そしてカニングガムのスタジオでピアノ伴奏者を務めていたロバート・ダン (Robert Dunn, 1928-1996) が、これをダンスの構成法へと応用したクラスを同スタジオで教え始めるのが1960年である。受講者にはシモース・フォルティ (Simone Forti, 1935-)、スティーヴ・パクストン (Steve Paxton, 1939-)、イヴォンヌ・レイナー (Yvonne Rainer, 1934-)、トリシャ・ブラウン (Trisha Brown, 1936-2017) が含まれ、ここからいわゆる「ジャドソン教会派」が形成された。彼らは1962年から64年にかけて「ジャドソン・ダンス・シアター (Judson Dance Theater)」として公演を行い、以後も精力的に活動した。なおパクストンは1961年から64年までカニングガム舞踊団にダンサーとして参加、ブラウンも同年にカニングガムのスタジオで学び始めている。一般的には、ジャドソン教会派はケージの考え方をカニングガム以上にラディカルに追求したものと考えられているが、パクストンやブラウンのように、むしろジャドソン教会の集まりをきっかけとしてカニングガムへと向かっているケースもあることには注意を払っておきたい。

またこの時期、カニングガム自身は、ダンサーに即興的な判断を委ねる*Field Dances* (1963年初演)、*Story* (1963年初演) を制作し、1964年にはヨーロッパとアジア各国をめぐる世界ツアーを敢行する。また1960年代から顕著になるのは、映像などの新しいテクノロジーへの取り組みであるが、これについては3節で改めてふれることにしたい。

## 2. 他ジャンルのアーティストとの協働

舞踊史上の突出した存在が常にそうであるように、カニングガムの活動もまた単なる舞踊史の脈絡の中に収まり切るものではない。

同時代の名だたる美術作家や作曲家などと次々にコラボレーションを繰り返すカニングガムの姿勢は、しばしばディアギレフ (Sergei Diaghilev, 1872-1929) のバレエ・リュスになぞらえられ、1974年には両者を比較してみせる展覧会“Diaghilev/Cunningham”もNYで開催されている (*Fifty Years*, 190)。またそもそもリンカーン・カーステインがバレエ協会 (Ballet Society) を発足した際にモデルとしていたのがバレエ・リュ

スであり、先述したカニンガムとケージへの*The Seasons*の委嘱もこうした路線でのことだったという (*Common Time*, 50)。

その一方で、音楽や美術など他ジャンルとカニンガムの関係については、1950年代のブラック・マウンテン・カレッジ (Black Mountain College) を直接的な淵源と考えることもできる。とりわけ重要な契機は1952年にケージがここで上演した*Theater Piece No.1*で、カニンガム、デヴィッド・チュードア (David Tudor, 1926-1996)、ロバート・ラウシェンバークが参加している。ジャンルの境界を打ち壊すブラック・マウンテン・カレッジの様々な実験は、1956年からのケージの「構成法」クラス、および50年代に始まるネオ・ダダやハプニング、あるいは60年代のフルクサスなどといった、日常と非日常の境界にも疑問符を突き付ける前衛芸術の流れへと受け継がれ、こうした状況の中でジャドソン教会派も現れて来ることになる。

このように、カニンガムにおいては、ディアグレフ的なコラボレーションへの志向と、ケージ的な領域横断性への志向が合流していたと見ることができ、中でもカニンガムにとって最も大きな存在といえ、やはり生涯にわたって密接に協働したジョン・ケージである。偶然性や不確定性の理論のみならず、最初期のカニンガムが作品を発表する場を設けたのもケージであり、1953年のカニンガム舞踊団設立時から1992年に亡くなるまで音楽監督を務め、カニンガム作品で圧倒的に多く使用されているのもケージの音楽である (*Common Time*, 435)。

美術の分野では、やはりカニンガム舞踊団の初代美術監督 (1954年～64年) を務めたラウシェンバークが大きな存在といえよう。カニンガム舞踊団におけるラウシェンバークについては、池上裕子『越境と覇権——ロバート・ラウシェンバークと戦後アメリカ美術の世界的台頭』(三元社, 2015年) が詳しいが、舞台装置のみならず衣装や照明も手掛け、初期カニンガム舞踊団において欠かせない存在であった。上演における不確定性を大幅に導入した1963年の*Story*では、ダンサーが自由に衣装を選択し、ラウシェンバークは毎回異なる舞台装置を組んだ。ちなみに池上によれば、1964年のカニンガム舞踊団の世界ツアーと、同年のラウシェンバークのヴェネツィア・ビエンナーレ金賞受賞 (アメリカ人で初) の間には密接かつ複雑な関係があったようである。

1967年から二代目の美術監督 (1980年まで) を務めたのがジャスパー・ジョーンズ (Jasper Johns, 1930-) であり、この時期の作品としてはウォールホルの美術を使用した*Rainforest* (1968年初演)、ジョーンズの監修のもとデュシャンの「大

ガラス」を使用した*Walkaround Time* (1968年初演) などが有名である。

しかしむしろラウシェンバークが舞踊団を離脱した後のカニンガムにおいては、1950～60年代以降に常態化したインターメディア的な環境の中での、様々な領域のアーティストたちとのコラボレーションがますます多彩に展開したというべきであろう。フランク・ステラ (Frank Stella, 1936-) やナム・ジュン・パイク (Nam June Paik, 1932-2006) から、ブライアン・イーノ (Brian Eno, 1948-)、川久保玲 (1942-) まで、1964年以降のカニンガムは確かにディアグレフ的な精神を受け継いでいたというべきかも知れない。

1965年に初演された*Variations VI*は、ケージとカニンガムに委嘱されたもので、チュードア、ビリー・クルーヴァー (Billy Klüver, 1927-2004) の協力により、ダンサーや照明の動きが音を発生させる仕組みが考案され、さらにはナム・ジュン・パイクも映像で参加している。この作品が典型的に示すように、異ジャンル間のコラボレーションはしばしば新しいテクノロジーの導入とも連動していた。なお1966年には、クルーヴァーとラウシェンバークなどが中心となって、9 Evenings: Theatre and Engineeringと題する実験的な連続上演が行われ (カニンガムは参加していないが、ケージやジャドソン教会派が多数参加している)、翌年アーティストとエンジニアが協働する集団「芸術とテクノロジーの実験 (Experiments in Art and Technology)」が設立された。そしてカニンガムにおいても、1960年代からはテクノロジーとの関係が大きな比重を占めるようになる。

### 3. テクノロジーの導入

ダンスを意味表現や音楽から独立させるという (モダニズム的な) 方針と並び、映像やコンピューターなどテクノロジーの積極的な活用がカニンガムの大きな特色であることは間違いないだろう。とりわけビデオダンス (videodanceあるいはdance for camera) への先駆的な取り組みと、コンピューターによる振付システムである「ライフ・フォームズ (LifeForms)」の開発は、舞踊史において画期をなす重要な功績といえる。

カニンガムが初めて映像技術と接したのは1961年、モントリオールのテレビ局においてであった。ここでは時間の制約もあって納得のいく成果が得られなかったようだが、むしろこの経験を通じて、カニンガムは舞台と映像で空間の見え方が大きく異なることを認識したという (*Fifty Years*, 125)。再びカニンガムが映像技術を扱うのは1972年初演の作品*TV Rerun*で、これは上演中にリアルタイムの撮影を組み込むというものであった。上演において映像技術を使用する手法は1979年初演の



Localeでも試みられ、カメラの動きが振付の一部に含み込まれた。

他方、ダンスを撮影して映像作品（ビデオダンス）を制作する作業は、チャールズ・アトラス（Charles Atlas, 1949-）との協働を端緒とし、作品としては1974年の*Westbeth*が最初である。当時、カニンガム舞踊団では「専属映像作家（filmmaker-in-residence）」という制度を設けており、アトラスはカニンガム舞踊団で舞台監督助手を務めた後、1978年から83年までこの専属映像作家として映像作品の制作に携わった。カニンガムとアトラスによる代表的な作品に、映像レベルでの動きの構成と振付レベルでのそれとが複雑に編み合わされた*Channels/Inserts*（1981年）などがある。

アトラスの次に専属映像作家（1983年～98年）となったのがエリオット・カプラン（Elliot Caplan, 1953-）であり、カニンガムと制作したビデオダンス作品*Points in Space*（1986年）は高く評価された。アトラスとカニンガムが編み出したカメラと振付の関係が、さらに衣装や舞台美術も含めて複雑かつダイナミックに構成され、一定の「中心」をもたないカニンガム的な空間の表現に到達した。

1980年代後半に入るとコンピューター技術が身近になるが、カニンガムはヴァンクーヴァーのサイモン・フレイザー大学の研究者とともにコンピューター・グラフィックスの人体を用いて振付を可能にするソフトウェア「ライフ・フォームズ」の開発に関わり、1989年から試用を開始、1991年にはこのソフトで作った振付を含む作品*Trackers*を初演した（カニンガムと「ライフ・フォームズ」については、Thecla Schiphorst, A Case Study of Merce Cunningham's Use of the Lifeforms Computer Choreographic System in

the Making of *Trackers*, M.A. Thesis at Simon Fraser University, 1993が詳しい）。創作と記譜を同時に行うことができるこの革新的なソフトは後に商品化され、よりダンスの振付に特化した「ダンス・フォームズ（DanceForms）」とともに、現在もヴァージョンアップされている。

他方、1990年代に発達したのがモーションキャプチャー技術であり、カニンガムも1998年から技術者との共同研究を始めた。その成果として1999年に初演された*Biped*は、モーションキャプチャーによってCGで描かれたダンサーが3D映像として舞台空間に投射され、生身のダンサーと共演するというもので、大きな話題となった。

#### 今後の研究に向けて

以上、マース・カニンガムの長く精力的なキャリアを概観した。ごく一般的な三つの視点ではあるが、それでも細部に目を凝らしてみると、様々な発見の種がある。冒頭でもふれたように、カニンガム生誕100年を記念してアメリカとヨーロッパでは様々なイベントが行われ、他方では非常に充実したオンライン・アーカイヴが財団によって公開されており、資料をもとにした再検討は今後ますます進んでいくに違いない。広範かつ多様なテーマを一身に凝縮したような複合体としてのカニンガムは、われわれのアプローチ次第で、異なった相貌を見せてくれるはずである。

#### 【参考文献】

- Harris, Melissa (ed.) 1997, *Merce Cunningham: Fifty Years*. New York: Aperture.  
Meade, Fionn and Joan Rothfuss (eds.) 2017, *Merce Cunningham: Common Time*. Minneapolis: Walker Art Center.

#### 【年表】

- 1919 ワシントン州セントラリアに生まれる。タップダンス、社交ダンスを習う。  
1937 コーニッシュ芸術学校（シアトル）で演劇から舞踊に専攻を変える。元グレアム舞踊団のボニー・バードが指導。同校で講師として招かれていたケージと出会う。  
1939 ミルズ・カレッジのベニントン舞踊学校でルイス・ホーストの構成クラスを受講。マーサ・グレアム舞踊団に加入。  
1940 ケージが初めてプリベアド・ピアノのための曲を作る。  
1942 グレアム舞踊団のメンバーであったジーン・アードマン、ニーナ・フォナロフとともに振付作品を作り、ベニントン・カレッジやハンフリー＝ワイドマンのスタジオで上演。ケージとの協働が始まる。  
1944 自身の振付による6つのソロ作品を、ケージとのジョイント公演で発表。すべてケージによる音楽。  
1945 グレアム舞踊団を脱退。  
1947 カースティンからの委嘱でバレエ協会のための作品*The Seasons*を初演、自身も出演。  
1948 ブラック・マウンテン・カレッジでケージ企画による*The Ruse of Medusa*（サティ作曲・台本）上演。ケージは偶然性に傾倒し、鈴木大拙の講義を受け始める。  
1951 *Sixteen Dances for Soloist and Company of Three*でケージとともに初めてチャンス・オペレーショ

- ンを取り入れる。NYでラウシェンバーグが初の個展。
- 1952 ケージとともにブラック・マウンテン・カレッジに滞在。ケージがマルチメディアによる*Theater Piece No.1*を上演（カニンガム、チュードア、ラウシェンバーグ等と）。ケージ 4'33" 初演。
- 1953 *Suite by Chance*で全面的に偶然性を取り入れ、空間・時間・位置をチャートとコイン投げで決定。NYでマース・カニンガム舞踊団の初公演。
- 1954 ラウシェンバーグが舞踊団の美術監督に（衣装・照明も含む。1964年まで）。
- 1956 ケージがNYのニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチで「実験音楽の構成法」を教え始める。ジョージ・ブレクト、アル・ハンセン、ディック・ヒギンズ、アラン・カプロウ、ジャクソン・マックロウ、ロバート・ダンが受講。
- 1958 *Antic Meet*（ケージ音楽）と*Summerspace*（フェルドマン音楽）をアメリカン・ダンス・フェスティヴァルで初演。
- 1959 NYでリヴィングシアターが拠点にしていた建物の最上階にスタジオを構える。カプロウ*18 Happenings in 6 Parts*、ブレクト*toward events: an arrangement*がルーベン・ギャラリーで行なわれる。
- 1960 ロバート・ダンの構成法のクラスが始まり、フォルティ、パクストン、レイナー等が受講。
- 1961 トリシャ・ブラウンがカニンガムに学びながら、レイナーやダグラス・ダンと作品を作り始める。パクストンが舞踊団に加入。モントリオールで初めて映像とダンスの実験を試みる。
- 1962 ジャドソン・ダンス・シアターの第一回公演。ケージとチュードアが訪日。
- 1963 *Field Dances*でダンサーに即興的な判断（入退場、順序、回数など）や振付の選択を委ねる。*Story*ではダンサーが衣装を自由に選び、ラウシェンバーグが毎回異なる装置を組む。
- 1964 世界ツアー（ヨーロッパ、インド、タイ、日本）。ラウシェンバーグがヴェネツィア・ビエンナーレでアメリカ人初の金賞を受賞。
- 1965 *Variations V*でダンサーの動きによって音が生まれるシステムを使用。国立芸術基金（National Endowment for the Arts）が設立される。
- 1966 *9 Evenings: Theatre & Engineering*で、ケージ、パクストン、レイナー、ラウシェンバーグ、チュードアなどが作品を上演。
- 1967 ジャスパー・ジョーンズが舞踊団の美術監督（1980年まで）。
- 1968 *Rainforest*でウォーホルの美術を使用。*Walkaround Time*はデュシャンの「大ガラス」を使用する他、デュシャンへのオマージュを様々含む。
- 1969 *Canfield*でトランプを使った創作。動きがランダムに選ばれる。
- 1970 グリニッチ・ヴィレッジのウェストベスを拠点とする（2011年の解散まで）。
- 1972 *TV Rerun*でカメラによるリアルタイムの撮影を上演に組み込む。
- 1974 チャールズ・アトラスとともに最初の映像作品*Westbeth*を制作。
- 1979 カメラの動きも振付に組み込んだ映像作品*Locale*を制作。
- 1986 エリオット・カプランとの協働によるビデオダンス作品*Points in Space*が高く評価される。
- 1989 コンピューター技術者とともに「ライフ・フォームズ」の開発に関わる。
- 1991 「ライフ・フォームズ」を部分的に使用した作品*Trackers*を発表。海鳥をモチーフにした*Beach Birds*を初演。
- 1992 ケージ死去。チュードアが音楽監督を引き継ぐ。
- 1994 円形舞台上で上演される*Ocean*を制作。
- 1995 小杉武久が音楽監督に。
- 1999 *Biped*でモーションキャプチャーと3D映像による舞台美術を使用。
- 2002 1980年代から描いていた動物の絵を集め、書籍*Other Animals*として出版。
- 2003 チャンス・オペレーションによる決定を舞台上で行い、観客にも見せる*Split Slides*を上演。
- 2006 *eyeSpace (20')*で観客に生演奏とiPodのどちらかを聴くかを選ばせる。
- 2008 ラウシェンバーグ死去。
- 2009 死去（享年90歳）。